風土
モジリアリの女ふりかへる十二月
左手を右手のつかも初覚
神田川継目を見せず去年今年
冬の鴨ふところで秘す「山家の集」

城太郎に会ふ臘梅を心あて

白鳥

神蔵

器
白鳥来る男晴れして杉並区
鶴鶴の乗って薄氷刃なす
モーツアルトの真白き一花冬薔薇
大寒やメタセコイアの炎立つ
松過ぎてになり百年の大木戸間
寒鯉の動かねば氷氷らせず
法金剛院青女の滝の冬桜
竹間集

同人作品

冬
桜

島谷 征良

雪の夜の
南うみを

冬の鶴

大竹 淑子

横走る雪に屈みて菜を引けり

雪掘って菜はさみどりの雲かな

新聞紙ぬらして包む寒の鯉

注連売りのまはりの雪の踏み荒れて

雪の夜の瓶の中なる帆掛け船

雪しぼり夢より覚めし山のこゑ

かたれの雨となりけり桂郎忌

芭蕉 忌や 樸の梢を雲の影

医者替えへ効き目のうすき風邪薬

秋深し 城を真中に町さびれ

わが昔着し外套や子に似合ふ

冬桜一枝は日さしとらへけり

雪の鶴 音羽なる舞台に冬日遍

石仏の面輪伽へし冬日和

冬の鶴阿弥流為 母礼の碑の戻り

いがつちの神の庭なり芝枯るる

寒禽の柱となりたたり水流れ
追憶

— 小野寺節子 —

普段着の老尼の素顔
山茶花散る

貧しき世をなつかしみ麦を蒔く

佐渡恋しつ師の句集名「波の花」

雪降るや懐ふは佐渡の旅人

桂郎を待つと熱燭さめちやった

年移りゆく桂郎の古手紙

追憶の重たし雪しぐれ

これからを生き甲斐とせむ返り花

十二月八日の白湯のあまかりき
風花に生きてゐるものを言葉のありやなし

雪虫がみても古いの呪へ

ひとり居の良くも悪くも冬至風呂

数は日や胸乳に当てる聴診器

数は日や胸乳に当てる聴診器

眉にかもかく庖丁みがき年用意

美しく老いゆく同志明日の春

踊僧の丸いくるぶし目の寒し
風土独語／神蔵器

マッチの火水に沈め十二月

杉本英子

この句は当時、私有の仏壇の前である。「私がアリスと
何とか母を治したい」という思いが、薬の開発への熱意につながっ
たのです。薬王さん flakes は語っている。この薬は行政能力により
英国ギリシャ特別賞、薬院発明賞で、日本薬学会技術賞などで多く
の賞を受賞されたが、母さんが薬の成功を待つまでに他界され
ました。薬灌には昔ながらの大形の匯用マッチと手前にある、という
ような専門家が置いている。蝋燭に火を点し、マッチの火を水に泡とジュ」とか小さな水を上げた次の火消し
で、火を消す。すべての懸念が一瞬にして雲散霧消する。亜を押し
と、亡き人を選びする人方ある。作人は静かに今日あることを
喜び、生きる新しい力が湧いて来たのはなかろうか。

別荘念仏の圧巻はコ火の法要である。念仏の合掌が止むと、
切な火中に、火打石の音が、火花が一つ一つと
飛び散った。思い出を今、凝視していると、一瞬の火花は用
意されている火口に吸われたようで、火口の火は摺り木に転火され
灯火された。それまでどうも風は無かったのに、火花燃え上が
る。念仏の隠れ場を風で、雨をかがみて幼児炎を燃ばせた。も
ので念仏の隠れ場を、火をつけるが、火花が一つ一つと

遊行の一つ火を、念仏によって復活された菩提の火であれば、

この句の隠れ場は、吾人の心の煩悩の隠れ場であろう。

ポケットの底のはるかや着ぶくれ

柴田久子

「着ぶくれ」というと、どこかおかしな気があり愛敬があるが、

PDF版 謡話の salon
鯉揚げてあとは手で摺る蝦諸子

浅田 光代

「立って居るものは親でも使え」というのが元の格言である。

作者は十一月の多忙時、たまたま近くに立っておられたご主人に用を頼んだのだ。これは仲良しのご夫妻。かえってほほえましい。

PDF=佇誌のsalon